

## 特集

# 「小6①公立中高一貫校模試」

## 中学入試レポート

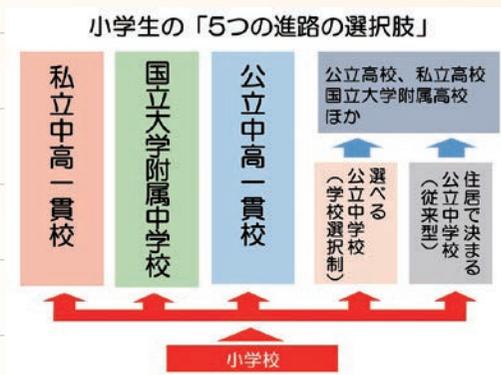
### 小学生が選べる「5つの進路」から、 6年間にわたる中高一貫教育 ならではの魅力と特質を見つめ直す

来春2020年度公立中高一貫校入学者選抜＝「適性検査」合格をめざす多くの小6受検生は、この時期、そこに向けた受検勉強に励んでいることだろう。

一方この時期、そうした受検生の保護者は、受検勉強の学習面にとどまらず、心身両面のサポートと並行して、我が子の小学校卒業後の進路を改めて真剣に考慮し、我が子にとって最善の「進学校選び」をしていかなければならない。

各種メディアにおいて取り扱われない日がないほど、「2020年大学入試改革」が間近に迫った現在、我々が暮らす日本では、教育がそのシステムの根幹から大きく変わろうとしており、「大学入試改革」を契機として、日本の教育はまさに未知の世界に飛び立とうとしている。我が子が大学入試に挑戦するのは、まさにその世界に直面するときと言えるだろう。

今回のレポートは、そうした大きな変革の渦の中で、選択可能な「5つの進路」から、改めて「中高一貫教育の魅力と特質」をしっかりと見つめ直すことを通して、我が子にとっての最善の「進学校選び」をするための一助として頂きたい。





## 特集 小学生が選べる「5つの進路」から、6年間にわたる中高一貫教育ならではの魅力と特質を見つめ直す

### なぜ、いま、中高一貫教育？ 中高6年一貫教育の魅力と特質を考える

本レポートのタイトル部にあるように、現在、卒業後に小学生が選択できる進路（中学校）は、多様化している。この図には入っていないが、このほかにも国内外のインターナショナルスクールや国内学校法人が経営する海外校に進学する小学生も、少数ではあるが存在する。いまの小学生の保護者が同時代を過ごしていたころに比べて、まさに隔世の感がある。

その小学生が卒業後に選択できる「5つの進路」の一つである公立中高一貫教育校＝公立中高一貫校は、1998（平成10）年6月の学校教育法改正を受けて、翌1999（平成11）年4月開校の宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校から設立が開始された。公立中高一貫校は、それまでの小学校卒業後の4つの進路に「新しい進路が加わる」として、当時全国の保護者の間で高い関心を呼び、各校の開校時の入学者選抜は高倍率＝高い人気となった。

その関心は一過性のもとの声もあったが、首都圏や関西圏等の地域を中心としてその後も入学者選抜の倍率の高さは変わることがなく、いまやその人気は全国区のものと言えよう。首都圏（ここでは東京都・神奈川、埼玉、千葉、茨城各県）では、2003（平成15）年に埼玉県立伊奈学園中学校が開校され、その後2017（平成29）年4月までに計24校（東京11校・神奈川5校、埼玉2校、千葉3校、茨城3校）が設立され、今春（2019年）には埼玉県のさいたま市立大宮西高等学校を母体とする大宮国際中等教育学校が開校した。同校は首都圏の公立中高一貫校初の「IB（国際バカロレア）教育プログラム」を導入する学校として大きな注目をあび、男女計160名の募集定員に対して男女計1010名もの応募者を集めた。

なぜこれほど公立中高一貫校は人気があるのか。その理由として、後述するように幾つもの項目をあげることができるが、何といたってもその最大の理由は、私立中高一貫教育校＝私立中高一貫校がその教育の大きな柱としている「中高6年一貫教育」だと考える。なぜなら、これまで中学入試が多くの受験（検）生・保護者に受け入れられ、評価されてきたのは、何よりも「中高6年一貫教育」の教育効果の大きさを認めたからにほかならないからだ。

次ページのコラムにまとめたように、「中高6年間一貫教育」には多くの利点をあげることが出来る。

ほかにも見方によって、まだまだ多くの魅力や特質が発見されると思うが、逆に問題点＝デメリットとして発見される点もあることだろう。例えば、その一つが高校入試がないことによって生まれるかもしれない「中だるみ」であり、公立中高一貫校のみに関してなら、私立中高一貫校のほとんどが週6日制なのに対して公立中高一貫校では週5日制であることから、公立校生が「（超？）多忙」な日々を送っていると想像される等々がそれである。しかし、中高一貫教育で先行し確実にその実績を積み上げてきた私立中高一貫校では、「中だるみ」さえもプラスに転化する指導や自己のこれからについて考える「キャリア教育」の充実等、



今春2019年2月3日の都立両国高等学校附属中の適性検査日の様子。2022年からは高校募集を停止予定だ。

## いまあらためて見つめ直す、中高6年間一貫教育の魅力と特質とは？ ～中学と高校との継続性・一貫性という利点を生徒の成長に生かす、中高一貫校のノウハウ～

我が子が来春受験～合格～入学を熱望する公立中高一貫校、及び私立中高一貫校の「中高6年間一貫教育」の魅力とは、どのような点にあり、その特質とはどのようなものなのかについて、ここであらためて考えてみよう。

考えられる魅力や特質＝メリットとして次のような点をあげることができる。

### 1. 高校受験がない

時間的なゆとりがあるため、そのゆとりを学習や部活動・課外活動・社会活動等に生かすことができる。

### 2. 親密な人間関係が育成できる

生徒と教職員・先輩と後輩・(社会活動等を通じて)学外の人々と等、中高6年間にわたって幅広い年齢層の人々と、親密な人間関係を育てることができる。

### 3. 「(高等教育への)進学準備教育」ができる

各校が掲げる中高一貫6年間の教育理念・教育方針のもとで、中学入試から大学進学までを見通した教育ができる。さらに加えるなら、中学3年+高校3年で大学入試に挑む受験生に対して、分断されない一貫教育による優位性があること。

### 4. 教育カリキュラムの再編・工夫や、それにもとづいた授業実践・展開ができる

“中高一貫＝中・高が分断されない”利点を生かして、中高各々の教育カリキュラムの重複や無理・無駄を省き、つながりのある教育カリキュラムへの再編・工夫及び授業の実践・展開ができる。

### 5. 生徒の心身の最重要な成長期に、教職員の効果的なサポートが期待できる

人の一生で最も多感で心身ともに変化の大きい中高6年間の時期に、教職員が継続して(学校によっては6年



今春2019年の都立白鷗高等学校附属中の適か検査日の様子。2021、2022年の年度から高校募集を停止予定。

間にわたって)生徒の成長を見守り、精神的・体的・学力的発達に応じて、生徒各々にふさわしいサポートやアドバイス等を行うことができる。

### 6. 入学者選抜がある

各校が掲げる独自の建学理念(公立中高一貫校は公立校ではあるが、それぞれ異なった建学理念がある)・教育方針に賛同し出願＝我が子の教育に対する意識のベクトルが同じ保護者が出願し、各校独自の(アドミッションポリシー＝どのような生徒を求めるかにもとづく)入学者選抜によって選抜された生徒・保護者が一堂に会し、互いへの理解や協力のもとで、フレキシブルな教育活動の工夫・実践ができる。

より深化し、より多彩な教育プログラムを構築・実践し効果をあげてきた。また、公立校生が「多忙」な日々を送っていると言われることについても、6年間一貫教育の魅力である「無理・無駄のない教育カリキュラム」の実践により、克服しているのが現実の姿である。

まとめるなら、「中高6年間一貫教育」には、これまでの公立学校教育における公立中学校3年+公立高等学校3年という、間に高校入試をはさんで「3年+3年」の教育では得ることが出来ない、実り多い教育効果が生まれる可能性が高い要因や教

育資源が在るとしたことなのだ。

それを証明する事例と考えられそうなニュースを二つあげておこう。

東京都では、

① 2021(令和3)年度入学生から  
 都立富士高附属中・武蔵高附属中

② 2022(令和4)年度入学生から  
 都立大泉高附属中・両国高附属中

③ 都立白鷗高附属中については予定として  
 2021(令和3)年度以降

それぞれ高校段階での生徒募集を停止する。こ



## 特集 小学生が選べる「5つの進路」から、6年間にわたる中高一貫教育ならではの魅力と特質を見つめ直す

のことは、実質的に高校併設の附属中を中高一貫教育の6年制中等教育学校として再生することを意味する。これが、中高一貫6年制教育の、「3年+3年」教育に対する優位性への評価でなくて何であろうか。結局、現在の都立中高一貫校はそのすべてが中等教育学校となるのである。

また茨城県では、これまでの県立中高一貫校3校に加えて、下記の改革が公表されている。

[1] 2020（令和2）年度から県立高5校に

併設型中学校を開校

[2] 2021（令和3）年度から県立中等教育学校

1校と県立高2校に併設型中学校を開校

[3] 2022（令和4）年度から県立高2校に

併設型中学校を開校

しかも、中学校を併設予定の高校には、茨城県を代表する県立高の雄でありライバル校でもある、県立水戸第一高と県立土浦第一高が含まれるのだ。

保護者の皆さんは、上記の事例をどのように考えられるだろうか。

### 首都圏の中学受験生は増加し続け、公立中高一貫校受験生も増加する中で、私学の「適性検査型入試」実施校が増加中！

今春2019年4月にはさいたま市立大宮国際中等教育学校が開校したが、首都圏各都県に公立中高一貫校が新設・開校される度に、首都圏の「公立中高一貫校への入学志願者数」は増加し続けているのがこれまでの状況である。その状況を少し詳しく見てみると、あることに気がつく。それは、首都圏公立中高一貫校入学志願者の中で「公立中高一貫校しか受検しない」志願者の割合が年を追うごとに減少し、逆に「公立中高一貫校が第一志望だが、私立中高一貫校も併願・受験する」志願



東京都立の併設型中高一貫校5校は、すべて2021〜2022年にかけて高校募集を停止し、完全中高一貫教育校になる。都立武蔵高等専門学校もそのひとつ。

者の割合が徐々に増加しているということである。それは、首都圏公立中高一貫校が入学選抜を開始したころには見られなかった状況だ。

その理由の第一として考えられるのは、通学可能な範囲に公立中高一貫校が存在することを知り、我が子の小学校卒業後の進路として考えた保護者が、そのことをきっかけとして中高一貫教育に興味を抱き、「中高一貫教育とは何か」と、情報を収集し分析した結果、既述のような「中高一貫教育の魅力と特質」を理解したこと。そして同時に、先行する私学の中高一貫教育への理解をも深めていったことだろう。その結果として「私学との併願」も我が子の進路として考えるようになったのだ。

本年度の中学入試における私学の「適性検査型（総合型・論述型・思考力型・自己アピール型等も含む）入試」実施校は、147校。そして、この「適性検査型入試」への応募者数は約13,000名を記録した。5年前（2014年）と比較すると、実施校は38校から、応募者数は約2,000名から大幅に、しかもごく短期に増加したことがうかがえる。

このように私学の「適性検査型入試」受験生が年々大幅に増加してきた最大の理由は、既述した通り、公立中高一貫校受験生及び保護者が私学の「中高一貫教育」をも理解し、まずは「力試し＝本番へのステップボード」として受験したからである。

加えて、適性検査型入試を実施する私立中高一貫

校が、そうした公立中高一貫校合格をめざす受検生の我が校への併願を（それがたとえ「力試し」であっても）積極的に受け入れ、より多数の受検生が受験しやすいように多様な工夫（入試日程設定・入試形式・出題内容・受験料設定等）をしたからである。

一つ例をあげるなら、都内公立中高一貫校入学者選抜＝適性検査の本番2月3日以前に「適性検査型入試」を設定し、入試後には答案を開示するだけでなく、問題解説や解法のポイントアドバイスを実施する等、志望する公立中高一貫校の適性検査対策までしてくれる私学さえある。

ならば、公立中高一貫校第一志望の受検生及び保護者にとっても、それを利用しない手はない。

さらにもう一つ。それらの入試を実施する私学の多くが、それらの入試で優秀な成績をおさめた受検生に対する「特待生制度」を設定する等、保護者の学費負担に対する配慮・措置をも用意することで、公立中高一貫校受検生への受け入れに積極的な対応をしてきた。

以上のような私学の工夫が、公立中高一貫校受検生の家庭の多くに喜ばれ、受け入れられたことは容易に想像できる。

こうした多様な私学の工夫・努力の存在及びその効果を十分に理解しているからこそ、首都圏模試センターは、公立中高一貫校受検～合格～入学

を期す小学生と保護者には、我が子のこれからの教育環境として「中高6年一貫教育」を選択したこの機をきっかけとして、「私学にも目を向け」て、我が子が受験できる機会を存分に生かして頂くことをお勧めしたい。

**日本の大学入試が変わる、すなわち教育が変わる！  
求められる教育や学習スタイルは、  
中高一貫教育校が先導する！**

そして、中学入試受験者数が増加傾向を維持した理由として、また私学の「適性検査型入試」実施校及びその受験者数が増加している理由として、最近の中学受験生の「保護者の意識の変化」が大きいと考えられる。

現在の高校2年生が最初の挑戦者となる「2020年大学入試改革」の影響がそれである。この改革が象徴する、これからの日本の教育改革の動きとそれが示す方向性に、多くの保護者が敏感に反応した。

今回の「2020年大学入試改革」の方向性は、これまでの「得た知識を駆使してスピーディーに正解を出す」＝「獲得し蓄積された知識を限られた時間内に正確にアウトプットする力」を問う現在の（ほとんどの）大学入試のあり方を根底からひっくり返し、「獲得される知識を駆使して、課題を発見し解決する思考力・表現力・判断力・コミュニケーション能力」等を問う入試に変革しようとするものであり、「知識・技能獲得・定着型の学力」に加えて、「主体的・多様の・協動的に学ぶ（学べる）力」の有無を問う入試に改革しようとするものなのだ。さらに言うなら、国際化・グローバル化・ボーダーレス化+AI社会の到来に備えての改革であり、それは同時に、20世紀型教育の「学力観・学習観・入試観」をも含めた「教育観」そのものを根底から大きく改革しようとするものである。



適性検査に「グループ活動」を課す神奈川の県立中高一貫校を受検する小学生にとって、その練習にもなる聖セシリア女子中の一日方式グループワーク型読解・表現入試。2年続きで多くの受験生を集めた。



## 特集 小学生が選べる「5つの進路」から、6年間にわたる中高一貫教育ならではの魅力と特質を見つめ直す

私たちが生きる現21世紀は、AI問題だけにとどまらず、労働力等の供給過剰（過少）、技術革新、消費動態の変化等々、国境を越えた（国際）社会の急速でドラスティックな変化に迅速な対応が要求される時代である。そこには、これまでならあった“正解”等はなく、まさに「解なき時代」である。こうした誰もが未体験の新しい時代を生きていく受験生のための「学びのスタイル」を、各々の学校がめざす理想の人間像や教育理念と照合して、「これからの社会で生きるために必要な力を育むために、我が校はこのような教育をしていく」ということを、受験生や保護者に対して広く分かりやすく発信した私学が、最近の中学入試で注目され支持を集め、多くの受験生を集めている。

### 2020年大学入試改革にも対応出来る「思考力・判断力・表現力」を育むための中高一貫校の適性検査・入試の出題

そして、今回の「公立中高一貫校模試」受験生が受検し、合格＝入学をめざす各公立中高一貫校のほとんどが、既述の私学と同様に、都立小石川中等教育が教育の核とする探究を始めとした、各校独自の教育カリキュラムにもとづく探究・体験・調査・研究・発表・協働学習等に取り組む中で、「2020年大学入試改革」から求められる「思考力・判断力・表現力+英語4技能」にも十分に対応可能で、さらにその先の社会（＝世界）にも求められ通用する、“生きる力”を育成しようとしている。

例えば大学受験の実績を見るならば、2011年春の都立白鷗高附属の世間を驚かせた素晴らしい成果にとどまらず、神奈川県立相模原中等教育、横浜市立南高附属の各校1期生が東大に現役合格者を5名輩出する等、私学と同様に大学合格実績が注目されるようになった。



今春2019年入試では、2月2日午後と2月11日午前に行われた日本大学豊山女子中の「思考力型入試」。公立中高一貫校の「適性検査」にもなり、受験後発表後の受検機会として活用することもできる。

そのように見ていくとき、今後の大学入試改革を突破口として始められる「日本の教育改革」がめざす方向性を、私立中高一貫校と同様に公立中高一貫校でも実現していくために、中学入学者選抜＝適性検査において「自らの考える力」を問う出題がなされていると考えられる。

公立中高一貫校入学者選抜＝適性検査において出題される適性検査問題は、中学入試（主に私学）の主流である各教科（算・国・社・理）の学力＝主に知識や解法技術を問う問題とはその傾向が大きく異なる。一つのテーマで作成された題材を自ら読み・理解し・分析し・考え、指示された解答方法（選択・作図やグラフ・文章等で表現）にしたがって答える、総合的学力・問題解決能力を見る問題である。その形式は教科の枠を超えた「教科総合型」＝「教科横断型」の独特なスタイルであり、教科ごとに検査時間や問題配点が定められているわけではない。大問一つごとに、定められたあるテーマについて、図や資料・表・グラフ等を読み取る問題、放送（問題）を聴き取る問題、なぜそうなるかを社会的に理科的に考える問題、考えた過程や得られた結果を表現する作図・記述（作文）問題等が混在しているのだ。

その意味でも、「大学入学共通テスト」で問われる「思考力・判断力・表現力」は、まさに公立中

高一貫校の「適性検査」で求められる力と共通のものである。

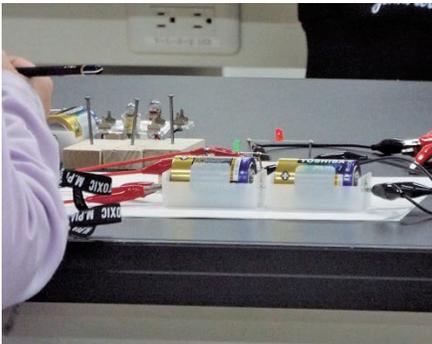
同時に、既述の私学の「適性検査型（思考力型・総合型・PISA型）入試」の出題も、公立中高一貫校受検生が「力試し」で受験しやすいスタイルで作成されているだけではなく、この先に待つ「2020年大学入試改革」を視野に入れ、さらにその先の社会が求める力をこそ育成していくことを謳う、各私立中高一貫校からの強いメッセージであると考えるべきだろう。

公立中高一貫校受検志望者には、この新しいスタイルの入試に、ぜひ積極的に挑戦してみたい。

**公立中高一貫校の高い人気による、  
 入学者選抜の厳しさも考慮して、  
 我が子の進路の選択肢を増やしたい！**

公立中高一貫校入学者選抜受検～合格～入学を期す受検生と保護者に、あえてここでお伝えしておきたいことがある。

それは何よりも、各公立中高一貫校は、それぞれの募集定員が少ない（男女計80名～最多でも160名）のに、男女合計で平均900名前後もの多くの応募者が挑戦する（しかも、公立中高一貫校では選抜当日に欠席する受検生はほとんどいない）ために、非常に厳しい選抜となり、かなり多くの受検生が入学を断念せざるを得ないということである。



今春2019年から公立女子第二中で新設された「サイエンス入試」。理科実験の好きな女子小学生にとっては「受けてみたい」新タイプ入試のひとつ。



様々な分野で在校生の活躍が目立つ、都立小石川中等教育学校。都立の併設型中高一貫校の高校募集停止の動きは、こうした「中高一貫校の高い教育効果」によるものだろう。

ある。

言葉を変えれば、大半の受検生と保護者にとっては、「ダメでもともと、合格したら儲けもの」の入学を選抜と考えられている一面もあるということだ。

そこで、我が子の公立中高一貫校受検～合格～入学を志向する保護者には、私立中高一貫校を「我が子の進路の選択肢＝併願校」として、ぜひ考えて頂きたいのだ。

公立中高一貫校の適性検査も、本質的には私立中学入試と何ら変わるところのない「入学者選抜」のための試験の一形態に過ぎないのであり、合格と不合格、喜びと厳しさが共存する場。それが現実の姿である。

そして、忘れてはならないことがある。それは、従来からの国立・私立中学校入試に挑戦するときによく言われる「きちんと押さえ校＝滑り止め校（併願校）を用意している親子ほど、合格する確率が高い」、ということだ。押さえ校を用意することで、受験生及び保護者に精神的な余裕が生まれ、思い切り挑戦できることで合格の確率アップにつながるということである。

我が子が志望校入学を目標として続けてきた受検準備の努力を、決して無にするべきではない。第一志望校には届かなくとも（その割合が高いのが現実である）、「第2（第3～）志望校入試には合



## 特集 小学生が選べる「5つの進路」から、6年間にわたる中高一貫教育ならではの魅力と特質を見つめ直す

格できた」という、我が子が達成感を感じられる入試体験をさせてあげること＝良い形で入試を終えることこそが、その後にとっても非常に大切なのである。

我が子の「達成感を得られる＝実り多い」受験体験のためにも、これから入学を志望する公立中高一貫校の入学者選抜当日までの、残された時間に「押さえ校」の準備をしてあげて頂きたいのだ。

現在の中学入試では、既述の私学の「適性検査型入試」の増加に加えて、さらに多様な入試の形態・コンセプトが拡大しつつある。「英語入試」の増加や、スポーツや音楽を始めとする芸術等の習い事に打ち込んできた小学生の“活動歴や潜在的な資質を評価＝学力以外の多様な能力を評価”し、新たな教育の場を創造しようとする新スタイルの入試（例えばプログラミング入試・自己プレゼンテーション入試・ポテンシャル入試・リベラルアーツ入試等）も現れている。

そうした「中学入試形態の多様化」がもたらす「中学入試準備スタイルの多様化」も、これからの首都圏中学入試で、我が子にとってのベストな進学先を選択するうえで、一つの大きなポイントになってきている。こうした、さらなる「中学入試の多様化」傾向は、私立中高一貫校だけではなく、公立中高一貫校受験志望者にも望ましいことだろう。

先行する大学入試、その「2020年大学入試改



今春2019年入試では2月2日AMに行われた和洋九段女子中の「PBL入試」を、来春2020年入試では2月1日に移行。21世紀型教育を実践する同校の、いま、を反映した入試だ！

革」の狙いの一つに、大学の個性化・多様化＝ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーの確立があるように、中学入試においても入口＝入試の形態が多様になり、その中から受験生と保護者が、より適合する入試を選択～受験するようになるなら、そこでは単なる「大学合格実績による学校選択」や「偏差値の数字による学校選択」は、多くの選択指標＝価値基準の一つに過ぎなくなるだろう。そしてそのときには、各校の建学の理念にもとづく教育内容の特徴や学びのカリキュラム、多彩で魅力あふれるその成果、校風や各校のカラー等が、受験生及び保護者にとって学校選択の基準として大きくクローズアップされることになるはずである。

待たなしにやって来る時代の変化と、大きく変わる日本の教育の真ただ中（ある意味で混乱した状況）にある我が子のために、「我が子にとって最良の進路」を探し、悩み、選択し、その学校への入学パスポートを得るために親子で一緒に歩むこと、挑戦することこそが、中学受験の最も重要な意義である。

最後に、すべての公立中高一貫校受験生及び保護者が、「我が子にあった」進路＝学びの環境を獲得し、実り多い受験（験）体験をして頂くこと、そして挑戦して良かったと感じて頂けることを、2020年中学入試に向けて心からお祈りしたい。



私立中入試では、首都圏の最難関レベルに上っている豊島岡女子学園も、2022年から高校募集を停止して、完全中高一貫校となることが最近公表された！